

# 徳を積む行動の認識とその行動頻度に関連する要因の検討

一向社会的行動，運資源ビリーフ，公正世界信念の観点から一

○遠藤美南・向居暁

(県立広島大学地域創生学部・県立広島大学)

## 問題と目的

日本では、「徳を積む」という行動がよく見られる。「徳」は「功德」とも呼ばれ、「現在，また未来に幸福をもたらすよい行ない」（精選版日本国語大辞典，2006）を表す言葉として用いられる。つまり「徳を積む」とは、「善行を積み重ねる」ことで現在または将来に幸福をもたらされるという考え方である。この「徳を積む」行動によってもたらされる幸福には，一般的な因果論に基づくものと基づかないものがある。「徳を積む」行動が他者の役に立ったという事実に対して，社会的評判や自尊感情の向上といった幸福がもたらされる場合，「徳を積む」行動ともたらされた幸福には因果関係があるといえる。一方で，ある不特定の他者への善行といった「徳を積む」行動のおかげで，「入手困難なライブチケットが当選する」と考えた場合，それらの間には直接的な因果関係はない。なぜ人々は，「徳を積む」ことに直接的な因果では想定できない超自然的な効果を求めるのか。

これまでに，「徳を積む」ことに関する心理学的研究は存在しない。そこで本研究では，まず「徳を積む」行動の内容やその頻度と向社会的行動との関連性を検討する。続いて「徳を積む」行動の頻度と公正世界信念，および，運資源ビリーフの関連性を検討する。前者は，自分の行動が現在や未来に幸福をもたらすという考え方であるためであり，後者は，物理量として存在しないにもかかわらず資源的なメタファーを用いて表現される概念であるという点で「徳」と「運」が共通するからである。

## 方法

**調査対象者** 大学生・専門学生 239名（男性 71名，女性 160名，回答しない 8名）を分析対象者とし，平均年齢は 19.76歳， $SD=1.00$ であった。

**手続き** まず「徳を積む」ことができる行動の具体的な内容，「徳を積む」行動に伴う良い効果の自由記述を求めた（複数回答可）。次に「徳を積む」行動の頻度を 5 件法で回答を求めた。また，「向社会的行動尺度（菊池，1988），多元的公正世界信念尺度（村山・三浦，2015），運資源ビリーフ尺度（村上，2009）が関連性の測定に使用された。

## 結果と考察

「徳を積む」ことができる行動の具体的な内容を問う項目では，84.5%の人が「ゴミ拾い」などの向社会的行動に類する内容を挙げた。その他には「嘘をつかない」などの道徳的行動が挙げられた。また，「徳を積む」行動の頻度と向社会的行動に弱い正の相関 ( $r=.282$ ) が認められた。この結果から「徳を積む」行動には向社会的行動が含まれると認識されていることが明らかになった。

次に，「徳を積む」行動に伴う良い効果を問う項目の回答を，①自分に対する実際の良い効果，②他人に対する実際の良い効果，③自分に対する超自然的な良い効果，④他人に対する超自然的な良い効果の 4 つに分類した。「自己肯定感の向上」や「他者からの信頼を得る」などの①を記述した人は 50.6%，「来世でいいことがある」や「コンサートの抽選に当たる」などの②は 50.6%，「相手もいい気持ちになる」などの③は 8.6%，④の記述は見られなかった。半数以上が②の超自然的な効果を記述したことから，私たちは「徳を積む」行動の見返りに，行動と因果関係のない効果を期待することが明らかになった。この結果は，「徳を積む」信念が，かなり一般的に人々に認められる不思議現象信奉の一種であることを示唆する。

続いて，「徳を積む」行動の頻度と公正世界信念の下位尺度，及び，運資源ビリーフの相関分析を実施した。その結果，内在的公正世界信念，究極的公正世界信念，不公正世界信念との間には有意な相関は見られなかったが，運資源ビリーフとは有意傾向 ( $r=.164$ ) が認められた。また，「徳を積む」行動の頻度を目的変数，内在的公正世界信念，究極的公正世界信念，不公正世界信念，運資源ビリーフを説明変数とした重回帰分析を行った結果，運資源ビリーフのみが有意な関連 ( $\beta=.164$ ) を示したが，全体の説明率はあまり高くなかった ( $R^2=.040$ )。この結果は，「徳」や「運」を資源として考えることの関連性を示唆するが，「徳を積む」行動には，その他多くの要因が関与していることを意味する。今後は「徳を積む」行動とより強く関連する要因について検討する必要がある。